

シンポジウム【HBO:2度と事故を起こさない 為の安全管理・対策】

第1種高気圧酸素治療に対する安全への取 り組みとして 移乗介助についての一考察

赤木貴幸¹⁾ 大畑雄太¹⁾ 金井克好¹⁾ 廣谷暢子¹⁾
青木理香¹⁾ 高柴國治¹⁾ 土居 浩²⁾ 荒井好範²⁾

1)牧田総合病院 CE部

2)牧田総合病院 高気圧酸素治療センター 脳神経外科

当院では2022年3月より第1種高気圧酸素治療装置(以下、第1種装置)4基を設置し、稼働している。治療では第1種装置の専用ストレッチャーへの乗り移りが必要であり、治療に際しては移乗介助が必要となるケースが多く発生している。

2022年度の患者総数は約307人で、その約1/3以上の患者に移乗介助が必要であった。

しかし、臨床工学技士(以下CE)は移乗介助の方法を学んでおらず、改善が必要となった。

移乗介助を安全に行うために、以下の4つの取り組みを実施した。

1. 移乗・介助について、当院の理学療法士から基本知識講座の講習・実習講座の開催。
2. 第一種装置専用ストレッチャーへの移乗介助を学び、知識や技術をCEに定着させる。
3. 講座・実習で学んだCEに聞き取りを行い、今回の取り組みの有用性について考察した。
4. 必要な補助具の検討を施行した。

結果としては非常に有意義であった。講座では基礎の介助知識に加え、車椅子からストレッチャーまでの移乗介助の指導を受けた。移乗介助の講習会の開催でCEの移乗介助の技術が向上し、患者の安全の向上し、不安が軽減された。

移乗の際、ストレッチャーの高さが高く、上がることが出来ない患者が多くいた。

以前からも足台は存在していたが、高齢者や体幹機能障害の方には高さに不安視させていた。今回の足台は面積が大きく、高さも2つあり、患者に合わせた移乗介助がしやすくなった。

移乗介助では、特に異性の場合、不快に感じる事がある。

不快感を軽減するために、3つの所作に気を付けて移乗介助を行う必要がある。

- ①行動前の声掛け
- ②密着体制の事を考慮
- ③手の所作に注意



密着させる部位の確認
手のひらを上手に使用
指の間隔を空けない



無造作に掴まない
手を広げない
食い込みは不可

高気圧酸素治療に関わるスタッフの移乗介助の知識と経験を増やすために、定期的なマニュアル作成や講習会の実施が必要となる。

これにより、CE全員が一定の移乗介助技術を確実に習得できると考える。